

## 対人援助職を選択した障がい者のきょうだいの新しい役割・自己像 - 職業選択およびそれ以降の転機に着目した分析

著者	上野 順子
著者別名	UENO Junko
雑誌名	東洋大学大学院紀要
巻	54
ページ	183-202
発行年	2017
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00009734/">http://id.nii.ac.jp/1060/00009734/</a>

# 対人援助職を選択した障がい者のきょうだいの 新しい役割・自己像 — 職業選択およびそれ以降の転機に着目した分析 —

福祉社会デザイン研究科社会福祉学専攻博士後期課程3年  
上野 順子

## 1. 研究背景・目的・方法・用語の定義

家族員に価値観や日々の生活の再構築を迫るような出来事とはどのようなものか。家族の中に障がいのある子どもが誕生するという不測の事態は、それに該当するといえるであろう (Seifert 1994:1-3; 吉川 2008:16)。そして、そういった渦中に育つ「障がい者のきょうだい」(以下、「きょうだい」と略す)は否応なくその状況に巻き込まれ、プラス・マイナス両方の影響を受けながら成長していくことになる (川上 2009; 石崎 2001; 森2006)。その中で、きょうだいの態度や価値観には親の影響が大きいと指摘されている (三原 2002; 吉川 1993; 戸田 2007)。

また、きょうだいは成長過程で様々な葛藤を抱えつつ、自分の中で徐々に兄弟姉妹を位置づけていき (山本ほか 2000; 向出ほか 2002; 川上 2009; 山本 2005)、個人のライフイベントの影響も受け大きく揺れ動き (田倉 2008)、転機を経て感じ方考え方受け止め方が変化していく (加瀬 2007; 全国障害者とともに歩む兄弟姉妹の会 1998)。彼らの人生の過程で訪れる「職業選択」は得がたい経験<sup>1</sup>の1つといわれ (Meyer 2004)、同時に転機 (黒川 2007)でもある。そのさい障がい者のきょうだいが対人援助職に就く確率は比較的高い (加瀬 2007; 三原 2002; ナイスハート基金 2008; 山本 2005)。また実際の生活においても、きょうだいは親の老後や死亡後の主要な援助者として期待がかけられてもいる (高野・岡本 2009; 縄田 2008; 三原 1998a, 2002)。

職業選択に至る諸事情は、過去から現在という時間の流れに沿って生きていく中で経験した様々な要素と関連している。特に障がい者を兄弟姉妹に持つ場合は、よりその影響は大きいと考えられる。よって、職業選択それ自体がきょうだいにとっての「転機」といえるであろう。そして、転機が転機を生み、転機は次第に生活の一部に統合されるといわれる (黒川 2007:136-137)。しかし、対人援助職者となったきょうだいが、転機を経て自己の経験をど

うとらえているか、という点に焦点を当てた研究は少ない。

本研究は、障がい者のきょうだいが「職業選択」およびそれ以降の転機を経て、自分の物語をどのように語るかを、ライフストーリー研究法（桜井 2005）を用いて記述する。ライフストーリー研究法は、個々の人生を尊重するものであり、事実だけではなく、その人が自己の経験を組織化していくプロセス、経験への意味づけの変化、自己と他者との関係がもたらす相互作用的影響、といった点を描き出すことを可能にする研究方法である（無藤・やまだ 2004; 桜井 2002; やまだ 2000）。

同時に、本研究は、人生上の出来事としての転機に着眼している。ゆえに、転機をその人の性格と対処集団、環境そして転機そのものの性質との間に起こる相互作用の過程（ブラマー 1994）と考える。そのため、シュロスバーグの転機（トランジション）の理論を援用して、ライフストーリーの分析を行う。

本研究は、ライフストーリー研究法を用い、対人援助職を選択した障がい者のきょうだいを対象とし、職業選択および職業選択以降に訪れた転機を経て、自己の経験や自分自身をどのように意味づけ、「新たな役割・自己像」を獲得しているのかを分析することを目的とする。なお、本研究で使用する用語の定義は次の通りとする。①「きょうだい」＝本研究の対象者。障がい者を兄弟姉妹に持つ者。「きょうだい」という関係性を表す場合にも使用する。②「兄弟姉妹」（「障がいのある兄弟姉妹」）＝研究対象者の兄弟姉妹で、障がいを持つ者。研究対象者における成長過程で受けた影響を検討するため、受障時期を先天的あるいは幼少時に限定する。③「対人援助職者」＝福祉、教育、心理、医療・看護職等、人に関わる専門職に従事する人。④「転機」＝新しい対人関係や役割、自己像を獲得する出来事（田垣 2004:57）。

## 2. ライフストーリーを理解するための理論・概念

### 2-1. 転機に関する理論・概念

ブラマー（1994）及び黒川（2007）によると、転機による変化の捉え方は「プロセス・発達段階の移行期としての転機」と、「相互作用・人生の出来事の視点から見た転機」の大きく2種類に分かれる。本研究は、「職業選択」および職業選択以降の転機に着眼している。よって、本研究では、後者の「相互作用・人生の出来事の視点から見た転機」の捉え方に該当し、転機そのものに着目するシュロスバーグの転機の理論の内容を援用し、対象者のライフストーリーを理解していく。

#### （1）シュロスバーグの転機（トランジション）理論

ナンシー・シュロスバーグ（Schlossberg, Nancy）は、転機を個人における独自の出来事として捉え、自分の役割、人間関係、日常生活、考え方を変える人生途上の出来事と位置づ

け、その出来事自体に注目する。シュロスバーグの転機（トランジション）の内容は、黒川（2007）が詳しく説明している。

シュロスバーグは、大きく3つの構造を主張している。

第一の構造は、「転機へのアプローチ」である。まず、「転機の識別（転機のタイプ）」がイベント（「予測していた」又は「予測していなかった」出来事：就職、転職、失業、引越、結婚、出産、離婚、病気、肉親の死等）であるか、ノンイベント（「予測していた」又は「期待していた」出来事が起きない：期待した会社に就職できない、昇進できない、結婚できない、子どもができない等）であるかを挙げている。転機がもたらす変化は①役割の変化、②人間関係の変化、③日常生活の変化、④自己概念の変化の4つである。

次に、「転機のプロセス」であり、「転機の始まり」、「転機の最中」、「転機の終わり」という段階が存在する。

第二の構造が、「対処のための資源の活用」となる。個人が転機を乗り越える能力に影響を及ぼす「4つのS」を提示している。個別の内容を見ていく。最初に「Situation（状況）」は、「引き金（何が転機をもたらしたか）」、「タイミング（転機は、一般社会的な時宜に合ったものか、早いか遅いか）」、「コントロール（転機のうち自分でコントロールできるのはどの部分か）」、「役割の変化（転機は、個人の役割の変化を引き起こすものか）」、「期間（長くつづくものか一時的なものか）」「過去に同様な転機を経験したことがあるか」、「転機にともなうストレスの程度」、「アセスメント（その状況を前向きに捉えているか、後向きか、都合が良いと考えているか）」といったものを指す。2つ目の「Self（自己）」とは、「変化への対処に関する個人的な特徴」、「変化対処に関係のある心理的資源」など、自分自身が持っている資源を指す。3つ目の「Support（周囲の援助）」には、「身近の関係者」、「専門家・専門機関」が該当する。「Strategies（戦略）」とは、「状況を変える対応」、「認知・意味を変える対応」「ストレスを解消する対応」が該当する。

第三の構造は、「転機に対処する：資源を強化する」であり、①豊かな選択肢：転機を乗り越えるための多様な方法を知っていること、②豊かな知識：自分自身をよく理解していること、③主体性：転機を乗り切るための各種リソースを主体的に活用することができる、という3点が重要ポイントとされている。

シュロスバーグは、1つの転機に終わりがあるわけではなく、転機が新たな転機を生み出していき、そのプロセスは永続的に続くものであり、それぞれの転機は次第に生活の一部に統合され続けていく、と述べており、転機が連続して起こる可能性を示唆している（黒川2007）。それゆえ、転機の理論は、人生の物語における、対象者の認知や役割の変化などを読み解くのに有効であると考えられる。

本研究では、シュロスバーグの理論・概念の中から、「転機がもたらす変化（役割・人間関係・日常生活・自己概念）」と「4つのS」を用い、対象者のライフストーリーの分析を

行う。

### 3. 調査の概要

本研究は、対人援助職を選択した障がい者のきょうだいの物語に着目し、「転機」を経て自己の経験や自分自身をどう意味づけているかを、当事者の語りから分析することを目的とする。そこで、これまでの研究を通じて知り合った対人援助職者に対象者の紹介を依頼し、調査への承諾が得られたきょうだい4名に対し、1名につき1～3回、1時間程度の面接調査を実施した。調査期間は、2010年12月から2011年8月である。4名の内訳は次の通りである。性別は女3名、男1名。年齢は20代、30代、50代、60代が各1名。職種は、教員、福祉職、看護師、医師である。本研究では、職業選択の回数が1回で情報量が多い医師のAさん（女性30歳<sup>2)</sup>）を事例として取り上げる。

分析手順は次の通りである。インタビュー内容の録音の可否を確認し、了解をいただいた後ICレコーダーにてインタビュー音声の録音を実施した。その後、録音データをもとにして逐語記録を作成し、分析の視座にしたがって記述した。逐語録引用に関しては、対象者の解釈や意味づけを含む語りを可能な限り対象者の発語のまま提示する。本文中に逐語録から引用する場合は「」を付け、フォントを小さくする。また、逐語録からまとめて抜粋する場合は、Aは対象者の発話、\*はインタビュアーである筆者の発話とする。また、引用した逐語録の下線は、筆者によるものである。本研究において、シュロスバーグの理論に基づく語句等を用いる場合は”” 付きで表記する。

### 4. 倫理的配慮

東洋大学大学院福祉社会デザイン研究科研究等倫理委員会の審査を受け、承認を得た上で、匿名性と権利擁護を確約して半構造化面接を実施した。対象者には、調査の概要及び拒否権があることや、録音データは使用後速やかに破棄する等の個人情報の取り扱いへの配慮を書面（「研究参加承諾書」）及び口頭にて説明を行い、署名・同意をいただいた。

### 5. 結果と考察

#### 5-1. 事例Aさんの概要

Aさん（30歳女、医師）は、生後まもなく父を亡くし、母親と知的障がいのある姉との3人家族で育った。幼稚園から高校までを国立の学校で過ごし、大学は医学部に進学。24歳で医師となり現在に至る。2歳年長の姉は現在グループホームで生活し、週末に帰宅する。29歳で結婚し母親や姉とは別居しているが、週末には可能な限り実家に帰るなど、母親と姉の生活を見守る立場にある。インタビュー時、Aさんは出産を控えていた。



## 5-2. 転機（職業選択）へのAさん自身の意味づけ

### （1）医学部へ進学という進路選択—最初の転機

Aさんの語りは、大学進学後に生活スタイルが大きく変化したことから始まる。Aさん自身が、医学部進学という進路選択の時点を、大きな転機と認識していることがわかる。

A：私はだいたい高校生くらいまでと、大学やっぱり医学部に入りましたので、大学以降医者になってからも含めて、生活スタイルが自分の中である程度変わったのが、高校と大学の間で大きく違ったと思います。（中略）幼稚園から高校までは国立の同じところに通っていて、しかも徒歩で通えるところだったので、距離もかからないし、家族と過ごす時間は多かったと思いますね。

高校までは家族と過ごす時間が多かったが、大学入学後は、学校（自分）のことが中心の生活となった。医学部進学という“Situation”の変化が引き金となり転機が始まり、“日常生活が変化”した様子が伝わってくる。

### （2）職業選択の動機—他者からの有効な助言

当初、Aさんは養護学校教員を目指していたが、他者からの有効な助言もあり、高校の最終段階で医学部受験を決定した。

A：最終的には高校3年生の時ですかね、担任の先生の女性の先生（中略）とあと母といろいろしゃべって、（中略）、これ誰に言われたのか定かでないのですが、養護学校の先生になると日中も障がい児と過ごし、家族でも姉がいてっていうのが果たしていいことかどうかという話をしまして、（中略）、いろんなことでひとまず医学部を受けてみようということを受けて受かったので。

他者の“support”が、高校生のAさんの進路・職業選択肢を広げるという“Situation”をもたらし、仕事と家庭の両方で障がい児者と過ごす生活の回避という、“状況を変える対応”につながった。これはAさんにとって有益な“Strategies”だったと理解できる。

### （3）転機（職業選択）の終わり—職業選択への意味づけ

Aさんは、「将来のこと決めるって結構大きい、学部を選択するってことは大きいですよ」と進路選択の重さを述べている。また、母親からの要望はなかったため、決断を躊躇する状態にあった。

A：高校生時の自分には、確固とした意思がなくても悪くもなく、母からも何にも言われていなかったのも、あまりにも選択肢が広すぎて、(中略)よくも悪くも決めかねていた。今、こういう選択をしてよかったのかなとは自分では思っています。(中略)学部に行って別に普通に通訳とかOLになったとしても、そこからまた自分の経験でいろんな道はあったらと思う。

自己の経験からしても別の道はあったと思う、としながらも、Aさんは今自分の選択に満足している。Aさんにとっての「職業選択」という転機は、終わりに向かっていて、その中で自分自身の選んだ道への意味づけを確認しているといえそうである。

### 5-3. 障がい者のきょうだいにおける「これまでの経験と家族員との関係性」の意味づけの変化

#### (1) 国立学校に学ぶ一固有の経歴

Aさんは、幼稚園から高校までを国立学校に学んだという固有の経歴を持っている。姉は別の学校である。それゆえ、「登下校とか、区立ではなかったので、それぞれ別々でした」というように、2歳の年齢差であれば、発生しがちな一緒の登下校の経験がない。また同時に、同級生は皆住まいが分散していて、交流もあまりなかった。

A：私幼稚園からずっと一緒なので、(中略)そういう子たちは運動会で姉が来たりとかで顔を見たりとかはしてますけど、改めて障がいがあるのだってことは触れなかったですね。私自身も、友達の家族とあんまり交流なかったです。地域というか、みんな住んでいるところはバラバラなので。

障がいのある姉がいることを、Aさん自身もあえて触れることはなかったこともあって、姉の障がいについては学校でもそれほど知られてはいなかった。固有の背景ゆえ、学校で姉のことを理由にしたイジメをうけることもない等、地域にある公立の小中に通学していた人とは経験が異なる。

#### (2) 葛藤—学校が違うのでうまく解消

Aさんは子どもの頃は、姉の障がいを隠そうとする気持ちと、大事で大好きな気持ちとの葛藤があったが、学校が別なのでうまく解消でき、家では姉と仲良くし、学校では普通にすることでバランスを保ってきた。

A：一緒の学校だったら、(中略)、姉の障がいがあるっていうことを、まあちっちゃい

ころは多分、隠そうって言ったら変ですけど、なかなかそれをオープンにすることが、自分の中でなんて言うのですか、姉を大事だと思っているし大好きだけど、みんなと違うっていうことに、自分の中での葛藤があったので、そういう意味で私はよくも悪くもそこがこう、区立で2つ学年違えば多分一緒にあの学校でみんなもわかっていたと思うので、その辺のところがいいのか悪いのか、そこの自分の葛藤はうまく自然と解消できていて、帰ってきて姉と仲良くして、学校では普通にするっていうか、はいはい。あったかもしれないですね。比較的うまく切り離れたのはそういうことかもしれません。

姉とは学校が別だったため、自分と姉をうまく切り離れたと意味づけている。物理的な距離感があることが、姉との関係性に好影響したと考えていることがわかる。ここはAさんの生活史の中で重要なポイントの1つである

### (3) 妹という立場からの戸惑い—転機を経て変化

Aさんは妹という立場から、姉の障がいにはやはり戸惑いがあり、自分の方が姉よりできることを子どもながらに気にしていた。今は、そういった気持ちにも変化が起きている。

A：私は立場が、私が妹で姉が上なので、どうしてもこう、私の方がまあ、言い方変ですけど、何かこうできたりとか、遊びに行っても、フィールドアスレチックとか、ジャングルジムとか、例えば、そういうのとかも私の方がこう早く行ったりとか、高くまで登れるとか、そういうのが子どもながらに姉よりできることに對してとまどいというか、いいのだろうかとか、なんかこう、そういう気持ちはありましたね。(中略) 子どもながらにそこはこう気にしていたというか。

A：そう子どもの頃感じていた、子どもながらにどうして姉はできないのだろうっていうのはある意味、受け入れられない部分はあったかと思うのですけど、大人になると、その人の能力が、いろいろ得意分野があったりとかわかる、個性というかわかるようになってきて、受け入れてきたのかな。

A：きちんと整理してっていうか、姉は姉でこういう姉だっていう風にわかった上で、じゃあ、自分はどうしようかっていうような形で、きちんと整理して一緒にいるのかなと思います。

A：なんか姉に対してはそうですね。特に大人になってからですかね。確かに守らなくては、って気持ちはあるかもしれないですね。おこがましいといったらあれですけど

小さい頃は姉の障がいを受け入れることが難しかったけれど、医師となり多くの人に接し、人の能力や個性の多様性に触れる中で、姉の障がいを個性として受け入れてきた様子がわか



る。そして、Aさんは、特に成人後は姉に対しては「守らなくては」という気持ちを持っている。ここには、医師になるという“Situation”の変化が機能したことによる“役割の変化”、“人間関係の変化”が表れている。

#### （４）随所にみられる母親の気遣い

誕生直後に父親を亡くし、母親と障がいのある姉との3人家族で成長していったAさんは、転機を経て、姉の障がいへの認識も変化した。そこに至るまでのAさんの生活には随所に母親の気遣いが見られる。その中でも、重要なのは、Aさんと姉を2人きりにはさせなかったことである。

A：姉とどこかへ行ったりとかというのはありましたけど、まあ、うちはその3人でという方が多かったかと思いますね。あのそれこそ公園に行くにも。（中略）休みの時も2人で遊びに行くというよりは、あの母と3人で、だったと思いますね。はい。

A：母は、今もそう言うのですが、あまりこう姉のことが家の中での中心になって、私の生活が影響を受けたりとか、いい意味でも悪い意味でも母が多分、結構いやがっていたのですね、だから姉の面倒をきょうだい1人しかいないのだから、私が姉さんであっても妹であっても私が見なさいとかいうのが、多分母の中でもいやだったのだと思うのですよね。で、遊ぶのも必ず母と3人で。

母親は姉のことでAさんの生活に影響が出ることを忌避し、面倒をみることを強要しなかった。そして、医師になり、“日常生活の変化”や“人間関係の変化”を経験した現在、Aさんは母親のこのはからいに対する感謝の思いを語っている。

A：まあ本当に感謝していますね、色々なんか多分本当に影響あると思うのですよ、障がい児障がい者が家庭の中にいるっていうのは、本当にみんな大変、ていう言葉がいいかどうかわからないですけど、影響はすごくありますよね、心理的にも物理的にも。（中略）デメリットの部分があったとしたら、そこを最低限にしてもらっていたかなっていう思いがあるので、そうですね。

このように、障がいのある兄弟姉妹が家族の中にいることは影響が大きいですが、Aさんは母親の気遣いにより、影響・デメリットを最低限にもらったとの思いを持っている。Aさんにとって母親は“support”を与えてくれる身近な人という資源であった。

## (5) 母親の高齢化や母親亡き後の将来への不安

Aさんは、母親の高齢化や母亡き後についての将来への不安を率直に語っている。

A：私ほとんど姉に対して物理的にもあまり割いていないので、母が例えば病気になったり、今後先に勿論、年齢からいけば亡くなるので、そういった時に姉と私が二人になるわけで、そういう時にもしかしたら何か姉のことを思うこともあるのかな、なんて思いますけど、それは少し先のことです。

医師になり、結婚し子どもを生み育てる、という人生の次なる転機の過程にいるAさん。今後“日常生活が大きく変化”することは予測可能である。今は姉に負の感情は無いが、母親の死後はもしかしたら、姉に対して何らかの感情を持つ可能性をAさんは自覚している。しかし、Aさんにとって”その状況は予測可能なこと“であり、”その状況を前向きに捉えている“とまではいえないが、決して悲観的にばかりは考えていない様子からは、“Situation”への対応がなされ、“変化対処に関係のある心理的資源”としての“self”が機能していると考えられる。

## (6) ケアする人は複数で一日常生活からケアの鉄則を学ぶ

Aさんは、母の負担を考慮し、結婚という転機の後も実家によく帰っているという。

A：父親がいたら違うのかなと思うのですが、母1人と姉っていうのは、お互いにとってちょっとよくないのかな、って、そうですね、物心ついたくらいから何となく感じていた気がします。

A：今でも休みの日に、(中略)、えーと、実家によく帰りますけど、(中略)、あまり2人っていうのが本人と誰かっていうのでずっと一緒にいるのが、お互いにとってあまりよくないって母は思っているので、誰か3人いるとか、(中略)、どうしても障がいのある人と多分、本当に2人きりってちょっと息詰まるときもありますよね。やっぱりこうお互いにとってよくないので、必ずケアする側が替わる、交代で何人かでみるっていうのも多分鉄則かなと思うので、母も多分そういうので。親1人なのでつらかったのかもしれないのですが、だから私と姉2人っていうのは、絶対にさせなかったので私は距離が持っていたので、邪険に思う前にこう離れる距離があったのかと思います。

Aさんは母親のはからいにより、姉に対して悪い感情を持つことがなかった。また、ケアする側とされる側1対1では行き詰まるので、必ず複数で交代してケアするという鉄則を日常の生活から学んでいる。

### (7) 母親からAさんへ家族の見守り役が移行—転機後に得た役割

今は医師となり結婚もしたAさんが、母親1人に負担はかけたくないという思いから、従来母が果してきた役割を遂行しようとしている。転機に対処する上での“Situation”が活用されたことによる家族内の“役割の変化”をAさんが引き受けたことがわかる。

A：私は母にそういう風にさせたくないので、(中略) 私もあまり2人にしないようにはうまくこう調整してというか、そうですね。

姉は今グループホームで生活し、土日に帰宅する。それゆえ、Aさんは忙しい生活の中でも母親と姉の2人にはなるべくしないように調整していると語っている。

### (8) 母親以外の大人との関わり

母親以外の大人との関わりも、Aさんの生活史では比較的大きな意味を持っている。父方の祖父母とも年に1回位の交流をもっていた上、近所に住む母方の祖父母とは長期休暇には旅行に行くなど、幸せな経験を重ねていた。

A：お休み夏休みお正月。必ずといっていいほど、母と姉と3人と、後は母の両親、私の祖父母ですね。5人で必ず旅行に行っていました。で、本当に、結構いろんなところに連れて行ってもらって、(中略) いろいろ旅行に行けたのが、自分の経験としても幸せなことだったのかな、と思いますね。

しっかりと大人にかかわってもらった経験、楽しい思い出があるから、「あまり追い詰められずに幸せだった」と言えるAさんは、母親も含めて”Support”を豊かに持っていたといえる。

### (9) 出産後の生活や家族関係の変化に対する希望と不安

結婚し、子どもにも恵まれるAさん。医師としてのキャリアも積み重ねたいという気持ちがあるが、今後について少し不安も漏らしている。

A：どうしても子どもが生まれると家庭の方に寄ると思うので、まあ、母と姉との付き合い方とかどうなるのかな、とその辺もきちんと整理しながら、仕事も整理しながらやらないと、と思ったりしますが、(中略) 仕事も、もうちょっとわたしもこう中間職になってくるので、そうなった時にどうなるかとか、振り返りながら冷静にまあ、判断していけたらなあと思うのですけど。

子どもが誕生すれば当然自分の家庭の方のウェイトが大きくなる。同時に、医師としても、経験年数の経過に伴い責任が重くなってくる。今後母親及び姉との関わり方も“変化することは予測可能”であり、Aさんも少し不安があるようである。職業選択という転機を経て得た家族内での見守り役という“役割”が、「出産」という転機により変化していくことになる。そのような状況に対しAさんは、「きちんと整理しながら」「冷静に判断していけたら」と語っている。それは、“状況や認知を変える対応”と言え、次の転機を乗り切るための“Strategies”となる可能性を持っている。また、新たな転機に対処するために“Situation”が働き、“その状況を前向きに捉えて”自分自身の人生を歩もうとする姿勢が見える。

#### (10) 出産して母親になる一子どもと姉の関わり

これから将来にかけてのことを次のように語っている。

A：子どもがどういう風に姉のことを受け入れるか。基本的には、オープンにというか、自分が実家に帰る時は、息子も連れてということを考えています。(中略)、私も振り返って、小さい頃から、そういうハンデがあったり、障がいのある子と触れることが、別に悪いことは特にないと思っていて、いろんな人を受け入れる価値観とか、そういうのが育っていくと思っているので、(中略) 障がいのある子や人をなんら特殊に思わない子どもに、子どもっていうか大人になって欲しいな。

A：子どもにとっては母親が、普通にしているって姿を見て育つと思うので、別にこうだよって口で教えるのではなくて、うまく行動で示すことで、わかってもらえたらなっていうのはあります。

ここでは、自分の生活史を肯定的に評価し、そこから得たものを次世代へと拡大しようとしている様子が見られる。“変化対処に関係のある心理的資源としての”“Self”を活用した“状況を変える対応”としての“Strategies”と推察することができる。

### 5-4. 障がい者のきょうだいの職業選択を通しての「意味づけ」の変化

#### (1) 医師になったことによるメリット

A：医者になったメリットは、女性として何か資格が欲しかった、(中略)、きちんとやりたかったというのが一つなので、医者はきちんと資格がある。(中略)、姉と過ごすので母が何を一番苦勞していたかというと、病院に連れて行くことが大變でした。(中略)、母がすごく心身ともに苦勞して、(中略)、お医者さんも全員理解があるわけではないすから、邪険にされた時も多分あったと思うのですが、そういうのが嫌だった。私が医者になることで、(中略)、病院という世界に少し足を踏み入れれば、姉が病気をした

時に、母の苦労も私の心配もなくなるって思いがありました。

Aさんは、母親が姉の通院に苦労した姿を見て育っているため、母親を助けたいという気持ちを抱いている。姉の通院に苦労した理由には、医師全員が障がい者への理解があるわけではないことも含まれていたとAさんは考えている。自分が人脈を作ることで母親の苦労や自分の心配を解消したいという思い、家族のために自分が頑張ろうという気持ちが読み取れる。それは、様々な経験をする中で、“変化へ対処”してきた積み重ねが、“自分自身の心理的資源”を強固にしていたためであろう。つまり、Aさん自身の持つ“self”が強化されたということになる。医師になることは、職業人としてのAさんにも意義があったのである。

A：資格がきちんと取れてそういう意味でも何か姉とか母の助けにもなれて、一生続けられて、医者はいろんな過ごし方、働き方ができます。(中略)、そういう意味でも、頑張って資格を取れば、いろんな過ごし方、今後女性としてあると思いましたので、頑張る意味があるかなと。

A：やっぱ、続けているのも姉がなんかあったときに自分の病院で、(中略)、婦人科だったり、あと内科でも何かあった時はうちの病院に来させようという思いはありますね。

確かに、Aさんが望んだ人脈がつくられてきている。そして、医師という職業は多様な働き方ができるので、「頑張る意味がある」と語っている。医師という“役割”を持ったことは、自分と家族員にとって大いに意義があったことをAさんははっきりと意味づけている。

## (2) 医師になったことによるデメリット

Aさんは、医師になったことによるデメリットを次のように語っている。

A：どのような職種でも、定時に終わる仕事はなかなかないとは思いますが、定時に仕事が終わらないため、また、休日や夜間に当直業務があり、家族にさける時間が少ないことがデメリットです。

「医師という職業に限らない」が、と前置きした上で、業務多忙で家族のために使える時間が制限されることがデメリットだという。重要な点は、ここでいう“家族”が結婚後の家庭ではなく生まれ育った家庭であること。母親一人でなおかつ障がいのある姉の存在というものの大きさが表れていると同時に、その家庭を大事にし続けたいAさんの優しさと愛があふれている。また、転機後に母親からAさんへシフトされた、家族の見守り役という「役割の変化」も、この感情には影響を与えているものと推測できる。



## 5-5. 障がい者のきょうだいであり医師でもある自分

### (1) 障がい者のきょうだいという経験知は有効

Aさん自身は、障がい者のきょうだいという経験知を次のように語っている。

A：障がいのある人っていうのを身近にいる分、受け入れるというか、は他の人よりはあると思うので、それはいいことなのかなと。この立場に生まれてきていい面はいっぱいあるよと思います。

A：なんの仕事をしていても結構つながるのかなと。この経験でどの仕事していても活きると思う。

このようにAさんは、障がい者のきょうだいはいい面も多くある立場であり、自分の経験知は何をしていても有効と感じている。それは、自分自身への、プラスの意味づけであり、多くの人と接する医師という職業を遂行する中で、資源としての“Self”の重要性が再確認されたことだと推定できる。

## 5-6. 獲得した「新しい役割・自己像」

### (1) 社会貢献する産婦人科医

次の語りには、医師になったことによる社会的に見た自分の「役割の変化」や「自己概念の変化」が感じられる。

A：たとえ例えば一人になっても、(中略) 母がいなくなったりとか姉が一人になって家がなくなったりしても、逆になんか死んではいけないなって思います。色々感じることもあって育ってきて、これから医者としても母親としてもなんか妻としても、社会にある程度貢献しなければいけないかなと、この職業になったからには思っているので、投げやりになってそれこそ自殺したりっていうのは、やっぱり育ててもらった母とか、色々影響を与えてくれた姉に、いろんな意味で育ててくれた祖父母とかに悪いかなと思います。(中略) 強く生きなければいけないかなと思います。

産婦人科医としての立場から、「社会にある程度貢献」という責任を感じ、障がい者を兄弟姉妹に持つことによる影響はあっても、「姉よりは多分甘えん坊で育ってきた」と経緯もあり、「強く生きなければいけない」という自分自身への強い肯定的な意味付けを行っている。命の大切さに対する強い思いは、産婦人科医としてのAさんの強みでもあり、“(出産等)社会貢献する産婦人科医”という「新しい役割・自己像」を獲得していると考えられる。

## (2) 障がい者への理解のある医師

Aさんは、自分の経験を医師という仕事で活用できていると認識している。

A：姉と一緒に生活してきた経験から、障がいのある患者さんでも抵抗なく診察できまし  
すし、本人や付添いの家族が何を不安に思い何を望んでいるか、他の同僚よりは理解で  
きていると思います。

障がいのある患者にも抵抗がなく、患者や家族が希望していることも他の同僚よりは理解ができる、と意味づけている。Aさんは、医師になるという転機を経て、「障がい者への理解のある医師」という「新しい役割・自己像」も獲得したと考えていいであろう。

## 6. おわりに

本研究は、ライフストーリー研究法を用い、対人援助職を選択した障がい者のきょうだいを対象とし、職業選択およびその後の「転機」を経て、自己の経験や自分自身をどのように意味づけているかを、シュロスバーグの理論を援用して分析してきた。

### 6-1. 考察

「職業選択」（就職）という転機は、きょうだい“家族中心の生活”から“社会の中で生きていく一人の人間”としての位置づけへと変化する最良のタイミング（上野 2011）と考えられるため、この時点にまず着目している。

母親と姉との3人家族であるAさんは、家族構成に特徴がある。また、医学部卒という高学歴な女性である。

小学校から高校まで国立の学校に通うという固有の経歴を持つAさん。高校での進路選択は、他者からのアドバイスによる医学部進学であった。大学進学後の“日常生活の変化”が大きかったAさんは、そのことをきっかけに母親や姉との新しい“人間関係”を築き、母親から見守り役という“役割”を引き継いでいる。また、職業として医師という“役割”を持ったことにより、母親が一番苦勞していた姉の通院問題の解消や、きちんと資格が持て、その上多様な働き方が可能など、Aさん及び家族双方に益をもたらしたことがわかる。

Aさんは自己の経験を肯定的に捉え、姉のこともきちんと自分なりに納得し、母の計らいを感謝している。また、出産し自分が母親になるという状況を控え、子どもにも普通に姉と接しさせたいと語っている。

転機を機に確実に新しい“人間関係”や“役割”を取得していったその姿は、自分の障がい者のきょうだいという経験も、「どんな仕事をしていても生きる」と意味づけ、「障がい者のへの理解のある医師」という「新しい役割・自己像」を獲得している。また、産婦人科医

という社会的に見た自分の立場が“役割及び自己概念の変化”をもたらし、「(出産等) 社会貢献する産婦人科医」という「新しい役割・自己像」も認識することにつながったのではないかな。

対人援助職においてはプロフェッショナルな仕事を行うために、援助者自身の自己理解の必要性が説かれている（増田ら 2000:216）。そういった意味では、Aさんが転機により「新しい自己像」を獲得したことは、対人援助職として自己理解が一步進んだといえよう。

障がい者のきょうだいは、「精神的・物理的に適切な距離を置く」ことが苦手（吉川 2008: 81）という指摘があるが、「職業選択」（就職）という人生の転機において、家族との物理的（心理的）距離ができることにより、家族員との関係性を再構築していくことにつながると、本研究を通じて知ることができた。その物理的（心理的）な距離が、次の転機においても有効となっていくことも確かであろう。

## 6-2. シュロスバーグの理論における「4つのS」

シュロスバーグの理論における、転機を乗り切るための資源とされる「4つのS」からの考察を行っていく。

Aさんの人生の物語においては、母親や祖父母、進路選択に影響を及ぼした人などの“support”の充実が、有効かつ重要な資源としてまず挙げられる。最初に着目する「職業選択（進路選択含む）」という転機においては、当事者は年齢的にも精神的にも、十分に成長した人間とは必ずしもいえないという面を持っている。そういった人間を支える“support”が必要なことは当然であり、人生の比較的初期の段階の転機においては、“support”が豊富にあることが大きな影響力を持つことは間違いのないであろう。

次に、恵まれた“support”と他の「S」との関係を考えていく。進路選択時には、“support”が、Aさんが障がい者にべったりとなる生活を回避できるように、“Strategies”を提示していると解釈できるであろう。同時に、それは、“日常生活や人間関係の変化を呼び込む,” “Situation”の展開でもあった。以上のことから、人生の過程からして、未成熟な段階で迎える転機には、まず“support”の存在が大きいこと、“support”に“Strategies”や“Situation”を保証してもらうことが大きな要素になっていくことが明らかになっている。

現時点での「S」の使われ方を確認していく。職業選択後に、“役割”“人間関係”“日常生活”の変化を得たAさんは結婚を経て、今出産という転機を目前にしている。そして、医師としての自分も、今後責任が重くなる立場であることを自覚している。それらの事情から、今後は母親や姉と自分との関係性が大きく変わっていくことを悟り、多少の不安も抱えている。しかしながら、Aさんは“その状況を前向きに捉える”ことができている様子であり、自らの力で“Situation”に上手に向き合っていることがわかる。

職業選択という転機において、家族との関係の再構築に成功し、確実な自己評価を持つ

て、新しい役割・自己像を獲得したAさんは、目前の出産という転機及び、将来訪れる母親の高齢化や親亡き後の状況に対して、“状況を変える対応”、“認知・意味を変える対応”、“ストレスを解消する対応”を自然に行っている。それは、自分自身が生み出した“Strategies”である。

当初は、他者から与えられるものであった、“Situation”や“Strategies”を、時間経過に合わせて自分で使用するようになっていく。それは、転機に向かううちに、“変化対処に関係のある心理的資源である”“Self”が磨かれ、他者(“support”)の力を借りなくても、道を切り開く力を身につけたことを意味するといえるだろう。

このように、転機を乗り越えるために、人は4つのSを全て活用していることを、Aさんのライフストーリーから理解することができた。同時に、4つのSは、転機を重ねるごとに強化されることも確実と解釈できる。また、“Situation”や“Strategies”は、経験により主たる使い手が“support”であるか“Self”であるかが変化するのではないか、という推測ができるであろう。

転機に対処するなかで、最も向上する「S」が“Self”であると考えられる。それこそが、人の成長を如実に表しているといってもいいのではないだろうか。

「4つのS」の関係性を考察したい。“Situation”や“Strategies”は、“support”や“Self”により「使われる」ものではないかと仮定できる。あくまで、「他者」か「自分」の力が動いて、初めて生きてくる資源と判断していいのではないか。

そして、“Strategies”は4つの中で最も「人生経験」を必要とする資源といえる気がする。つまり、活用するのが最も難しい資源ということになる。それゆえ、人生の初期においては、自ら(“Self”)用いるというよりは、他者(“support”)から与えられ、成長に伴い、自ら(“Self”)使えるようになるということが、Aさんの事例からも読み取れる。

それゆえ、どれか1つの「S」に偏ることなく、バランスよく「4つのS」を使い分けることが、充実した豊かな人生を送る上で重要である、そういった提言ができそうである。

このように、4つのSは、ライフストーリー研究において、人間の成長過程をよりよく理解する上で、有用な概念であると考えられる。

## 6-1. 研究の限界と今後の課題

本研究の射程は、障がい者のきょうだいであり対人援助職を選択した人のライフストーリーに着目し意味づけの変化を追うという「変動する社会構造内の個人に照準する」(桜井2002:14)ものである。今回は1事例のみであることもあり、これをもって普遍化できないという限界を持つ。しかしながら、「4つのS」という概念を援用し、個人の成長過程を丁寧に読み解くという、先行研究でもあまり行われていなかった部分を掘り下げることに意義があると考えられる。



今後は、さらに複数の対象者にインタビューを行い、数種のパターンを見つけていくことが必要になる。本研究の対象者は自己の経験を肯定的に評価しているが、否定的な人とは結果が異なる可能性がある。経験に否定的な人や退職した人などの声にも耳を傾けることが必要となろう。また、障がい者のきょうだいから得られた結果が、きょうだい特有のものなのか否かを確認することも重要な課題である。量的調査により、対人援助職に就いている人の経験を調べ、検証していくことも今後行うべき課題といえる。

## 引用・参考文献

- ローレンスM. ブラマー, 楡木満生・森田明子訳(1994)『人生のターニングポイント——転機をいかに乗り越えるか』ブレーン出版(株).
- 石崎優子(2001)「障害児・難病児の同胞の心理社会的問題と患児が家族の心理面に与える影響—障害児・難病児の両親の神経症傾向ならびに心理社会的問題を持つ兄弟姉妹の割合」『メンタルヘルス岡本記念財団研究助成報告集』13,17-23.
- 加瀬みずき(2007)「障がいのある人のきょうだいとして生きる—面接調査で語られた心の軌跡」『放送大学大学院研究成果報告平成19年度修了生 OpenForum』5,144-149.
- 川上あずさ(2009)「障害のある児のきょうだいに関する研究の動向と支援のあり方」『小児保健研究』5,583-589.
- 黒川雅之(2007)「ナンシィ・シュロスバーガー人生上の転機(トランジション)とその対処」渡辺三枝子編『新版キャリアの心理学—キャリア支援への発達のアプローチ』(株)ナカニシヤ出版,125-144.
- Donald Mayer, Director, The Sibling Support Project of The Arc of the United States (1999) BROTHERS AND SISTERS OF CHILDREN WITH SPECIAL NEEDS: UNUSUAL CONCERNS; UNUSUAL OPPORTUNITIES. (=2004, きょうだい支援の会・金子久子(訳)『特別なニーズのある子どものきょうだい特有の悩みと得がたい体験』きょうだい支援の会)
- 増田真也・外島裕・藤野信行ほか(2000)「対人援助職の適性に関する研究(1)」『茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学・芸術)』49,215-228.
- 三原博光(1998)「障害者の兄弟姉妹の生活意識について—結婚と両親亡き後の障害者の世話の問題を中心に」『ソーシャルワーク研究』23(4),55-59.
- 三原博光(1998)「知的障害者の兄弟姉妹の生活体験について—幼少時の体験や両親とのかかわりなどを中心に」『発達障害研究』20(1),72-78.
- 三原博光(2002)『障害者ときょうだい—日本・ドイツの比較調査を通して』(株)学苑社.
- 森優子(2006)「重度の障害児を同胞にもつ子どものこころの問題」『小児内科』38(1),75-78.
- 向出哉美・陸川敏子・真鍋裕紀子ほか(2002)「重症心身障害児のきょうだいへの看護—レ



- スパイト利用をする家族へのインタビューからの一考察」『小児看護』25(4),430-438.
- 無藤隆・やまだようこ・南博文・ほか（2004）『質的心理学—創造的に活用するコツ』（株）新曜社.
- 縄田裕弘（2008）「知的障害者のきょうだいの実態に関する一考察」『臨床心理学研究』6,109-121.
- 桜井厚（2002）『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』（株）せりか書房.
- 桜井厚・小林多寿子（2005）『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』（株）せりか書房.
- Monika Seifert 1993 GESCHWISTER IN FAMILIEN MIT GEISTIG BEHINDERTEN KINDERN Eine Praxisbezogene Studie. (=1994,三原博光訳『ドイツの障害児家族と福祉—精神遅滞児と兄弟姉妹の人間関係』（株）相川書房）
- 田垣正晋（2004）「中途障害者を理解する方法としてのライフストーリー研究の意義」『ソーシャルワーク研究』30(3),54-61.
- 高野恵代・岡本祐子（2009）「障害者のきょうだいの情緒的特徴に関する研究—きょうだいの意識と欲求不満の視点から」『広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要』8,94-106.
- 田倉さやか（2008）「障害者を同胞に持つきょうだいの心理過程—兄弟姉妹関係の肯定的認識に至る過程を探る」『小児の精神と神経』48(4),349-358.
- 戸田達也（2007）『フォーラム21「よい子」じゃなくていいんだよ—障害児のきょうだいの育ちと支援』（株）新読書社.
- やまだようこ（2000）『人生を物語る—生成のライフストーリー』（株）ミネルヴァ書房.
- 上野順子（2011）「障がい者の「きょうだい」で対人援助職を選択した人の家族員との関係性の意味づけとその変化—転機としての職業選択に焦点をあてたライフストーリー分析—」『平成23年度 東洋大学修士学位論文』
- 山本美智代（2005）「『自分のシナリオを演じる』 同胞に障害のあるきょうだいの障害認識プロセス」『日本看護科学会誌』25(2),37-46.
- 山本美智代・金壽子・長田久雄（2000）「障害児・者の『きょうだい』の体験—成人『きょうだい』の面接調査から」『小児保健研究』59(4),514-523.
- 吉川かおり（1993）「発達障害者のきょうだいの意識—親亡き後の発達障害者の生活と、きょうだいの抱える問題について」『発達障害研究』14(4),13-23.
- 吉川かおり（2008）『発達障害のある子供のきょうだいたち—大人へのステップと支援』（株）生活書院.
- 財団法人国際障害者年記念ナイスハート基金（2008）『障害のある人のきょうだいへの調査報告書』

全国障害者とともに歩む兄弟姉妹の会編（1998）『きょうだいは親にはなれないけれど—ともに生きる PART2』 ぶどう社

- 1 得がたい経験とは、特別なニーズのある兄弟姉妹（障がい者）がいるために体験したことを、人間的な成長につなげられる可能性のことである。（Meyer 2004）
- 2 年齢は調査当時のものである。

# **New Roles and Self-Image of A Sibling of the Disabled Who Chose to Have Human Service Jobs: Analysis Focused on Her Career Choice and Transitions Thereafter**

UENO,Junko

Having a family member with a disability is a confusing experience for his/her siblings that affects them both positively and negatively in their course of growth. Their career choice is a significant life event and also a transition for them. The rate of siblings of a person with disability who have human service jobs is relatively high and they are expected to be one of the major source of human service providers in the future.

In this research, the life story research method was used to analyze “new roles and self-image” a subject has acquired through her career choice and transitions thereafter. The subject was a female who have a sibling with a disability and have chosen to have a human service job. To promote understanding, Schlossberg’s theory of transition was applied.

Consequently, it was revealed that ‘four S’s’ were relied upon in her transitions to acquire her self-image while being influenced by changes in her roles and day-to-day life. Correlations among the four S’s, which are important resources to deal with transitions, were also explored.